

探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：東広島市立福富中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
東広島市立福富中学校	3	46
東広島市立福富小学校	7	86

(R4.11.1現在で記入)

1 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

研究テーマ：福富の地域に誇りを持ち、自分の生き方を考える児童・生徒の育成

～地域における探究活動と協働的な学びを通して～

自分が生まれ育った郷土は、その後の人生を送る上で、心のよりどころとなり、生きる上での精神的な支えとなるものである。地域での様々な人たちとの出会いや体験は、児童・生徒にとって人生の土台となり、自らの人生を考える時に大きな役割を果たすものである。福富という地域には、起業家や様々な土地からの移住者が多く、魅力的な場所も数多く存在する。この豊かな地域を活用し、様々な人と出会い、職業に触れ、考えを知ることで、児童・生徒が自らの生き方を考える上での学びが深まるのではないかと考えた。自己や郷土について主体的に考え行動できる児童・生徒を育成するため、地域の人々の生き方や地域の自然を知り、様々な生き方や価値観、仕事を見つめることで、自分自身のことや自己の生き方について考えさせたい。また、地域の人だけでなく、異学年で学習を進めることで、より学びが深まるのではないかと考えた。人間関係が固定化された同学年だけで学習を行うのではなく、異学年と協働で行うことは、児童・生徒にとって新たな考えと出合うきっかけになり、下級生は上級生の姿を通して学んだり上級生はリーダー性を育んだりする機会にもなると考える。

(2) 資質・能力の設定について

『探究的な学習の在り方に関する研究推進地域事業』2年目の始めの活動として、昨年度に作成した、「主体性・協働性」についてのルーブリックを発達段階や実態に応じて見直した。

	協働性	レベル	主体性
責任	役割をもち、最後までやり抜こうとしている。	1	課題について、自分の意見をもち、前向きに取り組もうとしている。
土言葉	他者の意見を聞き、自分の意見と違った場合でも、そのよさを認め、共感しようとしている。	2	目的をもって学習に取り組もうとしている。
土メタ認知	他者の意見と自分の意見を比較し、自分の意見を客観的に捉えながら課題解決に取り組もうとしている。	3	課題解決に向けて、見通しをもち、自分で目標を立てながら学習に取り組もうとしている。
土問題の活用	自他のよさを生かしながら、協力して課題解決に取り組もうとしている。	4	課題解決に向けて、自らさまざまな視点で考えようとしている。
土合意形成	議論をすすめることによって、合意形成を図ろうとしている。	5	設定した仮説に関する情報を自ら進んで収集し、結論を導き出そうとしている。

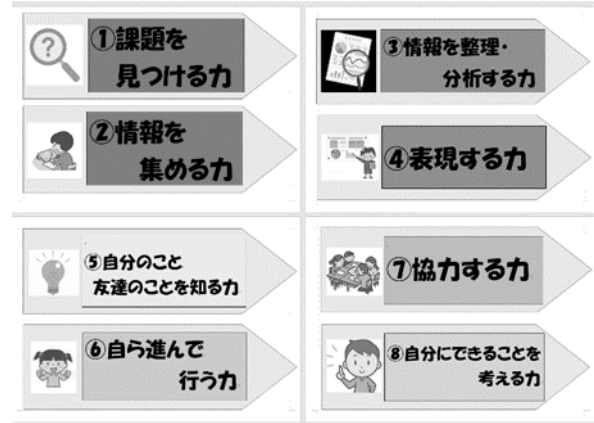
昨年度、実際に活動を行ったうえで、設定した資質・能力が妥当であるのか検討し、協議を重ね改訂案を作成した。昨年度のルーブリックより児童・生徒の実態を考えたものになっている。しかし、表現が抽象的なものが多く、授業中に表れる児童・生徒の具体的な姿ではない。授業中に児童・生徒の資質・能力を適切に見取るために、ルーブリックの設定した資質・能力が表れた具体的な姿を想定して、指導案に記載するよう工夫した。

(3) 取組について

①目指す資質・能力（主体性・協働性）ルーブリック（前記）

②児童・生徒への目指す資質・能力の提示について

昨年度の取組では、「児童・生徒にルーブリックの評価項目を明示していなかったため、指導者の見取りたい部分とずれが生じている。」という課題があった。いくら教師側がルーブリックを作成し、児童・生徒の評価へ生かそうとしても、児童・生徒が意識をしながら学習に臨んでいなければ、振り返りにもずれが生じ、見取りは難しい。そこで、今年度は、以下の掲示物を作成した。



「知識・技能」以外の「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」に関わる8つの評価項目について、児童・生徒に伝わるような言葉に変え、授業で提示した。授業の導入部分で伸ばしたい力について児童と共有したり、終末部分でどんな力が伸びたかについて振り返ったりさせることで、児童・生徒自身も「つきたい力」を意識しながら学習に臨めるよう工夫を図った。

③単元構成の工夫について

昨年度に引き続き、今年度もブロック毎に単元ストーリーを作成した。本校の単元ストーリーは、鈴木・宮里(2012)の提案した道徳学習プログラムを基として作成している。学習活動の流れをまとめた本ストーリーを作成することで、教職員間で連携ができ、同じ視点で児童・生徒の資質・能力の育成に寄与していくことにつながっていくものとする。昨年度との違いとして、導入部分と終末部分の工夫が挙げられる。福富小・中学校では、異学年集団で生活科や総合的な学習の時間を行っている。そのため、下の学年と同じ単元を2度行うことになるのだが、ここを利点と考え、成果や課題を引き継いでいく単元構成に変更した。上の学年は、昨年度の課題を踏まえたうえで学習に入るため、「今年度はこうしたい。」という思いをもつことができる。また、下の学年は上の学年からの思いを聞くことで、「自分たちもやってみよう。」という思いへとつなげることができる取組である。

④思考を深め、協働を促すための思考ツールの活用

協働性の育成を目指し、思考ツールを活用した。Yチャート、P MI、座標軸（四象限）イメージマップを活用し、思考の深化、協働性の伸長を目指した。

⑤積極的な地域人材・資源の活用

課題を解決するための情報収集として、地域の専門家に講師として来校していただいたり、現地調査の案内をしていただいたりした。また、課題解決に必要な情報を、体験を通して収集するために、積極的に校外活動を計画、実施させた。そのことにより、自分事として課題を捉えた上で、様々な視点で考え、自分の言葉で表現することができるようになったと考えた。

⑥学校や地域の行事との関連

今年度は、より学校行事や地域行事と関連させた探究的な学習

を展開した。10月には、地域の祭りであるアクアフェスタにおいて、小学校5・6年生が「地域の人と一緒に笑顔あふれる町をつくる」という目標をもち、木工のワークショップの実施や運営の手伝い、水に関するステージ発表、ごみのポイ捨て禁止を呼び掛ける活動を行った。また、来場者にアンケートを行い、広く意見をj得ることで、自分たちの学びを充実させた。

中学校の文化発表会では、総合的な学習の時間での学びについて、各グループが中間発表を行った。生徒が作成したスライドを用いてプレゼンテーションを行い、保護者へ伝えた。また、発表会の前には、中学生のリハーサルの様子を小学校5・6年生が見学する時間を設定した。小学校の学習発表会においても、各グループが取り組んでいる内容について、それぞれの取組に合わせた表現活動を行った。

#### ⑦校内研修の充実

今年度は、小・中全学年において、小中合同授業研究を行った。全ての学年を参観することで、発達段階や成長の過程をより把握することができた。小学校1・2年生の生活科の授業も研究授業を行うことで、中学校教員が参観するという貴重な機会となった。授業後には、小中合同で研究協議会を行い、様々な視点で協議を行うことができた。

## 2 実践事例

- 小学校1・2年生「ふくとみいね!おしえたい!」
- 小学校3・4年生「とも(共・友)にいきる(生・活)」
- 小学校5・6年生「夢の実現プロジェクトf」
- 中学校1・2年生「福富の魅力を守る」
- 中学校3年生「福富提言」

※「主体性と協働性」についての児童・生徒の変容に関する資料については、「【東広島市】福富中学校変容資料」として提出。

## 3 研究の成果と課題等

### (1) 成果

今年度の成果として、次の2点が挙げられる。

1点目は、資質・能力の設定と見取りについてである。まず、教師側が適切に資質・能力を育成するために、昨年度に作成した「主体性・協働性」についてのルーブリックを見直した。次に、ルーブリックのままでは表現が抽象的で、実際に授業で児童・生徒の姿を見取るには適していなかったため、もう一段階具体的な姿を「本時のルーブリック」として指導案に記載するようにした。そのことにより、教師側が育成すべき資質・能力を意識し、見取る準備ができた状態で授業に臨むことができる。また、児童・生徒のめあて・振り返りシートに、この時間に育成を目指す資質・能力を端的に示すようにした。本校では課題を探究していく流れの中で、先に進んでいる子どもの成長を止めないためにも、詳細なルーブリックは教師側のみが持ち、児童・生徒には端的に示した項目のみ提示する形で学習を進めている。授業ごとにどのような資質・能力が身に付いたか振り返りを記入することで、学習を通して資質・能力を育成しようとする意識が高まった。その結果はアンケートにも表れており、「総合的な学習の時間で学んだことや付いた力は、これから役に立つと思う。」の項目では、6月と12月の肯定的評価が【中3】100%→100%、【中1・2】89.3%→100% (10.7ポイント↑)、【小5・6】89.7%→100% (10.3ポイント↑)となっており、中学校から小学校高学年まで100%となった。

2点目は、児童・生徒や地域との協働についてである。各グループでJamboardや思考ツール、ホワイトボードや模造紙と付箋など、さまざまな形で協働的な学習を行ってきた。それだけでは

なく、中間発表などで他のグループの発表を聞いたり、その発表に対して質問やアドバイスをしたりすることで、福富に対する理解が深まり、より自分事として課題を捉え、主体的に活動することができた。また、今年度も昨年度と同様に、積極的に地域に出て活動を行った。(p.5 ④各ブロックの取組について参照) 学校運営協議会と連携して、地域への広報活動を行った。結果、本校の探究的な学習が地域でも話題となっている。外部から本校の取組が評価されることで、児童・生徒はより意欲的に活動を行うことができた。そのことを通して、福富の地域のことを深く理解し、自分たちにできることは何か考え、地域の役に立ちたいという意識が高まった。「福富町のよさや魅力、課題などについて知っている。」の項目では、6月と12月の肯定的評価の数値が【中3】92.3%→100% (7.7ポイント↑)、【中1・2】85.7%→96.3% (10.6ポイント↑)、【小5・6】75.9%→96.6% (20.7ポイント↑)、【小3・4】80.6%→78.6% (2ポイント↓)となった。中学校から小学校高学年までポイントが大幅に上昇している。小学校3・4年生については、活動を続けていくことで地域とのつながりを実感できるようになり、数値が上昇してくるのではないかと考える。

### (2) 課題

課題としては、3点挙げられる。

1点目は、カリキュラムマネジメント、他教科や学校行事とどのように関連付けていくかという点である。小学校低学年では、1年生と2年生で生活科の単元が違うため、異学年集団で活動する時に、活動内容と単元との関連を整理していく必要がある。小学校中・高学年では、小グループで分けた時に、教師の数が少ないことが課題である。中学校では、総合的な学習の時間の授業時間数が少ないことが課題としてあげられる。特に中学1年生は他の学年と比べて20時間も少ない。そして、中学2年生は、職場体験学習や修学旅行など行事が多く、その取組にも時間を必要とする。

2点目は、調査におけるアンケートの取り方についてである。地域の声を反映したアンケートを根拠として課題解決を行っていくことは、地域との協働的な学習の一つであると考えられる。しかし、アンケートを実施する数が少なかったり、対象が偏っていたりすると、一部の意見に左右され、正しく実態を捉えていないことになる。

3点目は、探究的な学習の単元の終わりをどのように設定していくかという点である。児童・生徒が主体的に探究的な学習を進めていくと、新たな疑問や課題が次々に出てきて、終わりが見えなくなってしまうことがある。

### (3) 今後の改善方策等

・質の高い探究的な学習を進めるためには、授業時間を確保することも必要である。そのためにもカリキュラムマネジメントを行い、防災教育と社会科、天候と理科、校外活動と学校行事など、探究的な学習を進めるための授業時間の確保のための工夫が考えられる。

・アンケートの対象をどうするのか、どのぐらい数を集めるべきなのか、客観的に説得力のあるデータになるかどうかという視点が大切である。より多く、より幅広く意見をj集めるために、工夫・改善をしていく必要がある。

・限られた時間の中での活動なので、教師側がどのぐらいまで活動を行うべきなのかある程度準備しておく必要がある。特に中学校3年生は9年間の集大成として、学習の成果をどのように発信していくか学校全体で考えていく。その中で、児童・生徒が達成感を感じ、目指す資質・能力が適切に育成されるように自分たちで活動を計画し、実践していくことができるようファシリテートしていく必要がある。